



根曲竹掛花籠



蛤谷空齊  
竹工芸 美の世界



煤竹網代編平水指



手付編花籠



煎茶炭斗



空齊竹工芸

空齊竹工芸

<http://kusai.hamaya-world.net>



蛤谷空齋はこれまで数多くの竹工芸作品を世に送り出した。戦後、博物館や美術館へと足を運ぶ傍ら独学で竹工芸術を始めた空齋は先人達の作品から多くを学び、竹工芸を自身のものにしていった。

初期の作品（30歳代）では花籠が中心だが、後に制作対象を茶道具へと拡げ、竹と漆とを調和させたユニークな作品を制作した。同時期、数江瓢鮎子先生から助言を受けるなど、人々から注目を受けるようになる。竹の持つ纖細さを生かしつつ使いやすさをも兼ね備え、かつその中に美をとらえた空齋の作品はまさに美術品と呼ぶにふさわしく、今なお多くの人々を魅了している。

蛤谷空齋先生はわたくしの心友である。先生とのつきあいは、先生の茶道具製作がはじまってからだから、そう古いことではないが、芸に志す者同士には必ずしも長年月を必要としない。先生は纖細な神経の持ち主のようだが、その実極めて大胆なところがある。このごろ竹編みの茶碗を拝見して、わたくしはアッと驚いた。まさに纖細にして大胆な味である。その他竹花入、茶杓、水指、香合いずれもそうである。皆さんもどうぞこの味をごらんになって頂きたいと思う。

数江 瓢鮎子

## 素材としての竹

竹は東南アジア原産の植物で、現代では竹を素材とした民芸品が、アジアンテイストとして日本で親しまれている。また古くから竹籠や笊を始めとする生活用品としても様々なものが作られてきた。

素材として利用するための竹には幾つかの種類があり、それぞれ用途に合ったものを用いる。最もよく用いられるのは真竹である。真竹は節の間が長く柔らかく、割る、剥ぐ、曲げるなどの加工がしやすい。またこれらの竹のうち、農家の屋根裏等で長い歳月を経て煤をまとった竹を煤竹と呼び、竹工芸においては特に珍重される。

網代編水指 銘「不識」



煤竹櫛目編花籠（花：紫蘭、升麻、縞草）